
遥かなる未来のメリークリスマス

D

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

遙かなる未来のメリークリスマス

【Nコード】

N2505B

【作者名】

D

【あらすじ】

「メリークリスマス」 そんな言葉さえ失われた遙かなる未来。古代の遺跡から発見された古文書の解読を進める男がいた。やがて彼がある古文書を解読したとき、荒んでいた世界はちょっとだけ変わっていく。

「新しいニュースが入りました。市街でテロによる小型ブラックホールが発生し二百人以上の市民が被害になった模様です。テログループはウレ八種の過激派シユラードと見られており現在も調査が進められて……」

モニターの電源を入れた途端、滅入るようなアナウンスが飛び込んできた。淡々と冷静に語る女性型のアンドロイド・アナウンサーの表情に変化はない。画面にテロリストのリーダーであるサガサリの顔写真が表示されていた。ひどく目つきの悪い男で、頭にはウレ八種の特徴である青い触覚が二本伸びている。

「またテロか……ここ最近ひどくなる一方だ」

そう呟く彼のスラックスの尻から生えている赤い尻尾がぐにやりと輪を描く。デニアン種が不機嫌になった証拠だった。

ん、と彼は反応した。モニターの下部にメッセージ受信を示す四角いアイコンが浮かんでいる。彼は球状をしたコンソール・デバイスを指ですつとなぞって本文を表示させた。

『ソングリオ！』

デニアン種が使うお決まりの挨拶がモニターの隣で聞こえる。

いつの間に現れたのか、そこには若い青年の姿があり彼に向かって

て笑みを浮かべている。何故か青年の輪郭は緑色に光っているが、これはモニターのヴィジュアル・メッセージ機能で立体映像と音声を再生しているだけのことだ。実際に青年がそこにいるわけではない。

『カップファ博士、どうぞ驚いて下さい。とてもユニークな資料を見つけたので添付しました。完全な解読には博士の頭脳が必要でしょう。では、今日はメッセージですが、次はアカデミーのほうで会いましょう！ 貴方の優秀な助手フレルより！』

青年が尻尾を二度左右に振って親愛なる、という意味を込めたところで立体映像が消えた。彼　カップファは明るくて賢いフレルが好きだった。

「では資料のほうを拝見」

カップファはコンソールを操作して添付されたデータを表示しようとした。ところが操作を誤り、先程のニュースチャンネルに切り替えてしまう。

「・・・ニマーナ・ロー、女性十八歳。クレミ・アマシン、女性四六歳。デド・カーサ、男性三九歳。フレル・ジンス、男性二十歳」

女性型アンドロイドは変わらない表情のまま、口をパクパクと動かし料理の材料を並べるように淡々と名前と年齢を読み上げている。

その中にフレルの名前を聞いた時、カップファは胸騒ぎがした。

「どづいことだ」

映像にテロップが流れる。

セキュリティの映像から身元が判明した犠牲者の名前をお伝えしています。心当たりのある家族の方は警察当局に連絡を。

目の前が暗くなり、カツファは意識を失いかけた。

フレル・ジンスはテロに巻き込まれ、ブラックホールの暗い渦に飲み込まれてしまったのだ。もう彼に会うことは永遠にない。

「畜生！ そんな馬鹿なことってあるか。だってあいつは俺にメッセージを送ったばかりじゃないか」

思わず先程のメッセージを再生する。

『ソジュリオ！ カツファ博士、どうぞ驚いて下さい。とてもユニークな資料を見つけたので……』

モニターの横に再びフレルの姿が浮かんだ。青年の無邪気な笑顔と生命力に満ちた明るい声を聞いていると、もう彼が死んでしまったなど信じられなくなる。

「テロさえなければこんなことにはならなかった」

カツファの悲しみはベクトルを変え、怒りへと走っていった。いっそもう消えてしまえばいい。こんな悲しみを繰り返すのなら、と。

その時、突然フレルの姿が消えた。メッセージが終了したのだ。モニターには添付データがあると表示されている。

「あいつが最後に送ったデータだ。ちゃんと見てやろう」

少し平静を取り戻し、カツファはコンソールをなぞった。

棒状の線による組み合わせの奇妙な記号がモニターいっぱいに浮かぶ。これは現代では使用されてはいない古代文字である。カツファは考古学者としての知識をフルに回転させ解読を始めた。

「生誕………祝福………贈り物………なんてことだ。これは本当なのか」

資料のソースが記載されており、サイバースペースに接続して検索してみると、確かにそれは遺跡から発見された古文書のデータに違いなかった。発見当時に重要視されなかったのか、データはかなり古く学者であるカツファでさえ知らないものであった。

「お前の意志は無駄にしない」

カツファは古文書の本格的な解読に取りかかった。

数週間後、ウレ八種の過激テログループ・シユラードはデニアン種の国家に対し和解を求め、今後一切のテロ活動を停止し、幹部層の人間のみ刑罰を受け入れる姿勢であると表明した。

「我々はあまりにも愚かだった。たかが触覚があるか尻尾があるか、そんなもので争い憎しみ、多くを失ってしまった。我々は過ちを清算したい。そしてウレ八とデニアンの関係修復を支援する」

モニターにはシユラードのリーダーであるサガサリが二本ある触覚を結んで表明文を読み上げている映像が流れていた。触覚を結んでいるのはウレ八種の反省の意を表している。

「突然の和解宣言ですが、それは考古学書カツファ博士が発表した“新説”が起因であるという話は本当ですか」

「ああ、そのとおり。遙か古代の人々の素晴らしい精神を現代人である我々は見習わなければならない。もし古代人が我々の有様を見たらきつと失望するだろう！」

記者団の女性型アンドロイドの質問にサガサリが答えた。

この会見の一週間ほど前、カツファは古代人の新たに発見された事実を論文にて発表し世間を驚かせたのである。

先のシユラードの表明の数日前、論文を発表し一躍有名になったカツファはバラエティ・チャンネルのトークショウに出演していた。

「すっかり人気者の博士ですが、正直どう思われてるんです？やはり、鼻が高いのでは？」

「この事実はすでにアーカイブにされていた古文書から解読し検証し発表したのです。それに情報をくれたのは助手です。まるで私のお手柄だと勘違いしている方が大勢おられますね。Mr.ポアラ、あなたも含めて」

軽薄な職業スマイルを浮かべ、人の心理を知ったかするMCのポアラに対してカツファはちくりと反撃する。

「おっとこれは手厳しい。ジョークですよ、ジョーク！ 博士はジョークがお腹一杯のようなので、そろそろ真面目にお話を伺いませうね、モニターの前の皆さんも宜しいですね」

「・・・・・・・・」

カッファはポアラのトーク・パフォーマンスにうんざりし、今更であるが出演したことを後悔していた。しかし収録は続く。

「いやあ、ほんと、あれですね。古代の人々は。たった一人の誕生日のために国中がお祭り騒ぎだなんて！ 私の誕生日もそうして欲しいですよ」

「ええ、それも一回きりではなく毎年です。何年、何十年と欠かさず祝ってあげていたんです」

「うんうん、あとあれですよね！ めでたいつて事で関係のない国中の子供たちにプレゼントを贈ったという謎の老人」

画面の端から女性型アンドロイドが現れて無表情でボードをカッファに手渡す。メインはアナウンサーだがこのチャンネルではアシスタントをしているようだ。視線が合うが、氷ついたかのような冷たい瞳にカッファは思わず目を逸らしてしまう。

「ありがとうございます このボードをご覧ください。これはMr. サンタ、その老人のイメージです。赤い衣装を着ていますね。古代でも珍しい空飛ぶトナカイで子供たちの家に回りプレゼントをこっそり配っていたのです」

「まったくクレイジーな……いや失礼、クールな老人ですね！ きつと相当なお金持ちだったんでしょ？」

ポアラは思わず口にした失言を笑って誤魔化する。

「確かにクレイジーかも知れませんが。しかし、これは素晴らしいことです。ここまでやれ、なんて言うつもりはありません。だが我々現代人が失っているものを彼らは持っているのです」

「は、はい。あれですね、私もそう言おうと思っていたんですよ！
うん」

トークをリードされている事に焦るポアラはさらに口を開く。

「この誕生日を祝ってもらってる人はほんと幸せ者ですね！ 確かメリークリスマスさんでしたっけ」

「……………それは彼を祝う言葉です。彼はキリスト氏です」

見事な空振りにポアラの職業スマイルが明らかにひきつっている。

「えっと、あれですよあれ……………メリークリスマス！」

そのかけ声と共に編集で入れた拍手喝采が巻き起こり、無理矢理チャンネルが終了する。

先日のトークショウに出演したことを未だに後悔しているカツプアはその時のことを思い出し、苦笑いした。

“クリスマス”を考案した古代人は広く美しい心を持っていたのではなく、ただのお人好しでレヴェルの低い文明を築いていただけ。そんな烙印を押されて笑話の種にされてしまうのではないかと危惧していたが、それは杞憂に過ぎなかったようだ。

今しがた、生中継で大統領が表明に合意しテロ組織と和解したことを宣言した。戦えばさらなる悲しみを生むだけだと理解したのだ。広い心を持っていた古代人のおかげかも知れない。そして、彼の優秀な助手の。

その時、カツファは寒気を感じ尻尾を振るわせた。空調システムの故障か？ そう思っただけでモニターからシステムを呼び出しチェックするも異常はない。ふと、窓の外に目が向けられた。

「雪………」

白い天使たちがふわふわと街中に降り注いでいた。まさか、とカツファは呟く。今は十月で、まだ雪が降るには早い時期である。そういうえば、と彼は思い出した。

モニターにカレンダーを呼び出し、計算してみる。

「今日は旧暦で十二月二十五日！ クリスマスなのか」

単なる偶然か、はたまた運命なのか。

そして時は過ぎ一年後。クリスマスは遙かなる時を越えて復活し和解の記念日として平和の象徴となった。過ちを繰り返さないよう、忘れないために。

この奇跡は誕生日をずっと祝っていてくれた、そして思い出してくれたことへの恩返しなのかも知れないぜ　粉雪の舞い散る中、カッファはひとつの墓にそう呟いた。

「あなたは、カッファ博士？」

どこかで聞き覚えのある声にカッファは振り返る。

そこには無表情で立っている女性型のアンドロイド。手には花束が握られていた。

「君はアナウンサーの。いつぞやは僕にサンタのボードを渡してくれたね」

そう言うと、無表情の顔が少しだけ変わった気がした。だがどう変わったのかわからない。目の錯覚かも知れないと思った。

「覚えていたんですか」

「ああ……その花束、誰かの墓参りかい？」

彼女は表情を変えず頷く。

「私が報道した、一年前のテロで亡くなった人たちに。自己満足かも知れませんが」

カッファは胸中で意外に思う。無機質な声で機械的に報道していた彼女には感情がないのだという勝手な認識をしていた。

「その顔は驚いてますね。私にも感情はあるんです。確かに人の手

で造られたものですが」

改めて見ると表情が少し曇っているのがわかる。第三者として報道しなければならぬアナウンサーとして本音を隠していたのだろう。それが癖のようになって表情や声が無機質になっていたのだ。

「……その花、こいつの墓にやってくれないか？」

彼女が薄く微笑んだように見える。いや、微笑んだのだ。カツフアも苦笑いを返し照れを隠す。尻尾がへの字に曲がっているのバレバレだが。

「名前を聞いても？」

「私はマリアといいます。みんなには、変わった名前だと良く言われます」

はて、とカツフアは考える。その名前をどこかで聞いたような気がしたが、思い出せない。だがしかし、とても美しいと感じた。

「マリア……君に言ってほしい言葉があるんだが」

「なんとなく、わかります」

瞳を閉じ両手を握って言葉に思いを込める。そして彼女はそっと祈るように呟いた。

メリークリスマス。

(後書き)

時期物を書いて見たくて、勢いで「やってしまった」作品です。
すみません。

教徒の方、私はキリストを馬鹿にしているわけではないので、あ
しからず、です。

読んで頂き有り難う御座いました。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2505b/>

遙かなる未来のメリークリスマス

2008年11月7日07時23分発行